

道 標

どうひょう

d o h y o

年間特集 「まつり」

第三回・踊る 蒲池 勢至さん

連載

あなたのいのちの物語 死者と故郷が支える孤独
伝承を科学する 掛け声は何のためにあるのか？
道しるべ 真宗本尊のふるさと

2023 夏季号



年間特集

「まつり」

踊る

第三回

蒲池 勢至 さん



青森ねぶた祭り・ハネト(跳人)

必ず地名が付いています。ですから「盆踊り」は総称なのでしよう。日本舞踊・歌舞伎舞踊も踊りです。

盆踊りの中には、全国各地の市・町内が主催するものがほとんどですが、「阿波踊り」など有名なものはもう「祭り」です。改めて、お盆の時期になぜ人は踊るのか、と考えてみると、私の中で「ああ、これが本当の盆踊りだ」と思っ

たことがあります。長野県下伊那郡阿南町で行われている「新野の盆踊り」(ユネスコ無形文化遺産)です。

新野は愛知県側からは豊根村を過ぎて新野峠を超えたところ、長野県の南端にあります。東海道と信濃を結ぶ遠州街道が南北に走り、東の遠山郷・秋葉街道に至る道、西へは売木村へ通じる道が交差する位置にあつて、かつては交通の要地でした。今、普段は静かな盆地の村です。八月十四日から十六日の夜にかけて行われる盆踊りは、古風な形態を残して、人でいっぱいになります。もうずいぶんと前に訪れたとき、八

月十六日の夜に愛知県の奥三河で行われる念仏踊りを順番に見て、新野に着いたときは午後11時頃でした。しようか。街道の町並み真ん中あたりにある「市神」という祠の前に「音頭台」という四角い櫓を組んで、村人たちが細長い円陣を作つて踊っていました。櫓には、新盆の家で祀っていた色鮮やかな切子灯籠がいくつも飾られています。踊り方は細長い円陣ですが、家並みに沿つて「並行」に踊っていました。櫓上の音頭取り

が新野に伝承されてきた歌詞を歌い出すと、ゆつくりとした動作で踊ります。扇を手にする踊りと、なにも持たない手踊りがありました。歌詞は六種類あつて、ゆつたりと繰り返しつつ踊っていました。深夜ということもあつて、正直、寂しい感じもしました。そこで車の中で仮眠して翌十七日の早晩5時くらいに行きますと、雰囲気は一変していました。溢れんばかりの人が集まっています。そして午前6時になると、切子灯籠を先頭に「踊り神送り」が始ま



「新野の盆踊り・切子灯籠

りました。村はずれの太子堂まで行列していき、今度は引き返して反対の村境まで行きます。途中、若者たちが行列をさえぎる行動に出て押し合い、もちろん祭りの儀礼としての押し合いです。そして最後は、切子灯籠を刀で切り壊し、積み上げると御嶽行者が九字を切つて精霊を鎮めると焼き払つてしまいました。

盆に踊る「盆踊り」は、もちろん生きていく者の娯楽的要素がありますが、基本的には死者や先祖を祀る盆行事の中で、精霊を迎え、生者は歓待して共に踊り、そして盆が終われば精霊を送り出す、というものでした。家々では、迎えた精霊を仏壇や盆棚で供養します。初盆では切子灯籠を吊り下げます。これが盆に訪

盆踊りは「美しく舞う」ことではなく、

「激しく跳ねて踊る」こと

れる精霊の象徴で、特にこの一年の間に亡くなった新精霊の依代です。

「郡上踊り」は大変に賑やかな盆踊りですが、やはり切子灯籠が下げられています。そして、岐阜県郡上市白鳥の「拝殿踊り」も神社拜殿に吊り下げられた切子灯籠の下で、床板を下駄で打ち鳴らしつつ踊っています。この床板（大地）を踏む所作や音が重要で、訪れた精霊を鎮め送る（鎮送）意味があるといえます。新野の盆踊りで「踊り神送り」の時には、鉦と太鼓を打ち鳴らしながら、ナンマイダンボ（南無阿弥陀仏）と唱えていました。

新野の盆踊りは、新野峠の南に位置する奥三河の東栄町振草から伝えられたものと伝承されています。この奥三河は、盆に踊る念仏踊りも盛んなところですが、豊根村坂宇場では、明治の神仏分離で仏壇が各家にはありませんが、「先祖を祀る社」はありますから八月十四日に百八の松明を焚いて先祖の精霊を迎えます。セガキ棚（施餓鬼棚）にお供えを、十六日の午前4時から5時に送り出します。これをソウリヨウ（総霊）さん送りといっています。送り

とも跳ねよかくても踊れ心駒

弥陀の御法と聞くぞ嬉しき

出されたソウリヨウは、十六日の昼間に今年のツクリ（作物の出来具合）を見て回るのだといわれています。夜になると念仏踊りの辻念仏でソウリヨウが集められ、村全体で供養される大念仏で村から送り出されるのです。大念仏は、念仏踊りの中にもソウリヨウ送りの時だけに唱えられるもの、と言っていました。

家々から送り出された精霊は、ムラの中を浮遊して辻念仏で集められ、ソウリヨウは跳躍の激しい念仏踊りによって供養されるのです。最後のソウリヨウオクリのころになると、切子灯籠が初盆の家の人によって持ち出され、広場の

櫓を回りながら大念仏を唱え、さらに灯籠に火を付けます。火のついた灯籠を持ったまま歩くのです。そして、近くの川に降りて行き、盆に訪れた全ての精霊が送られました。

盆踊りの始まりは、鎌



『日本の絵巻 20 一遍上人絵伝』巻7・中央公論社

倉時代の一遍（1239-1289）の念仏踊りに起源があると説明されています。『一遍聖絵』巻4の5段詞書（1299年成立）には、信濃国佐久郡小田切の里の武士屋形で「聖踊り始め給けるに」とあります。しかし、絵をみると伴の念仏房や人々は踊っていますが、一遍は縁側で鉢を叩いているだけです。その後、神奈川県川県の片瀬の地藏堂では時衆とともに一遍も踊っています。京都では板屋舞台の上で踊り、貴賤の人々が見ています。胸の鉦をカンカン叩き、ドンドンと足を踏む音が聞こえてくるようです。一遍が「とも跳ね

よかくても踊れ心駒 弥陀の御法と聞くぞ嬉しき」と歌っているように、信心を得た踊躍歡喜の念仏踊りでした。ですから、盆の念仏踊りではありませんでした。念仏踊りの流行により、また室町時代の風流踊りとも一緒になって、お盆の時期に踊られるようになったと推定できます。念仏には、もともと供養念仏・鎮魂（ちんこん）の意味がありました。「舞い」は廻るという円環的な動きですが、「踊り」の特徴的所作は足の上下運動です。「跳ねる」ことは足の所作と同じです。盆踊りは「美しく舞う」ことではなく、身体をいっぱいに使って激しく跳ねて踊ることが魅力なのでしょう。

蒲池 勢至（がまいけ・せいし）

1951年愛知県生まれ、現在、同朋大学仏教文化研究所研究顧問、前同朋大学特任教授・博士（文学）、第49回柳田賞受賞。著書『真宗と民俗信仰』（吉川弘文館）、『真宗民俗史論』『真宗門徒はどこへ行くのか』（法蔵館）、『探訪 真宗民俗―儀礼の伝承と現代社会』（東本願寺出版）、近著『真宗と現代葬儀「葬儀」と「死」のゆくえ』（法蔵館）他。

「死者と故郷が支える孤独」

若竹千佐子

「おらおらひとりいでいぐも」

作家自身よりも一〇歳ほど年上の主人公「桃子さん」が、夫の死後、死を前にした新たないのちに目覚める話だ。著者は岩手県遠野市出身で三〇歳頃から首都圏で暮らし、夫の死後、五〇歳代で小説講座に通い始め、六三歳でこの作品を書いた。

題の意味するところは、夫が死んで初めて、目に見えない世界があってほしいという切実な願いが生まれたということだ。これまで気にも止めなかった「あの世」が死別の悲嘆を通して、急に身近なものになってきたという。

これまで知らなかったのは、何よりも大切な人との死別の辛さだ。いったん、それを知ったからには、今までのままで生きていくことはできない。「自分が分かっていると思っていたのが全部こんな頭でつかちの底の浅いものだったとしたら、心底

身震いがした」。もう今までの自分では信用できない。「おらの思っても見なかつた世界がある。そこさ、行つてみて。おら、いぐも。おらおらで、ひとりいぐも」。

作品のクライマックスは、夫の墓参りに行く途中で足を痛め、苦しい道行き最後の段階にさしかかるところだ。「ここまできて足は限界に近づいたよう、ひっきりなしの痛みがあつた」。そこで、桃子さんの心は自らの死についての思いがふれてくる。「あいやあ、この痛み、生きていながらこそだおん。それでも当面のおらを辟易させるこの痛み、凌駕して余りある究極の安心がおらにはあるど、ほんとうに」。若い時には考えもしなかつた「死ぬるなどというごど」、まがまがしく忌み嫌つていたことだが、今は違う。

この小説では、死別の悲嘆と自らの死に備えて生きる生き方が正面から描き出されている。その意味では、無常を意識し、この世の生のはかなさを嘆く心が基底にある。それに対して、特定の宗教の答えがあつて、それを信じているというのではない。かといって死を恐れ、死に

とまどう、途方に暮れているというでもない。死に備える意識があり、自分なりに答えのようなものが見えてきている。『おらおらひとりいでいぐも』という題の「いぐ」は「死に向かつて行く」というニュアンスがあり、それを「おら」ひとりで行ける、それを示した小説とも言えるだろう。

この孤独を支えている一つの要素は「故郷」ふるさとだ。自分自身やさまざまな他者が、桃子さんの心の中から姿を現す。「ばつちゃ」（おばあちゃん）も度々登場するが、「ばつちゃ」の声自身、ふるさとの臨在を表している。桃子さんもよく理解しているのだが、桃子さんの心の中から湧き上がってくるさまざまな声は、実は過去の人々の声、先祖たち、死者たちが伝えてきた声のようでもある。

物語の終わり近くに、故郷の山、八角山が「ちつちやぐ」やせて見える夢を見たというエピソードが語られている。作家が遠野出身であることを知る読者は、六角牛山を思い浮かべるだろう。「いったい八角山とおらにとつてなんだべが」。「帰る処があつた。心の帰属する場所があ

る。無条件の信頼、絶対の安心がある。八角山へ寄せるこの思い、ほっと息をつき、胸をなでおろすこの心持ちを、もしかしたら信仰というのだろうか」。

だが、その八角山が「ちつちやぐ見えた」。それは深まる孤独の表れだ。この心細さをどうすればよいか。答えは伝えるということだ。「伝えねばわがね。それでほんとにおらが引き受けたおらの人生が完結するの でねべが」。桃子さんがわつと泣き出すと、そこに孫の「さやちゃん」がいた。美しいファイナーレだ。

島蘭進（しまぞの・すすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーンフケア研究所客員所長。著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちをつくつてもいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほぐく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学

学

する

掛け声は何のためにあるのか？

能楽には囃子が登場する。構成は、雛人形の五人囃子と同じで、笛、小鼓、大鼓、太鼓である。囃すという言葉の語源は「栄やす」であると言われる。その役割は、主役である歌い手や舞い手を、下から支えて導くことにある。囃子はときに、花に対する下草にたとえられてきた。下草は目立たないところから、花を支えるものである。

それならば、邪魔にならないようにひっそりと、舞台の陰に隠れているのが筋だろう。しかし、能の囃子は最初から最後まで、舞台の正面に並んで、前を向いて堂々と構えている。しかも、小鼓、大鼓、太鼓の三つの打楽器演奏者は、さまざまに打音とともに「ヤ」「ハ」「イヤ」などの掛け声を出している。その声はしばしば、大きく激しい。そのため、能の主役や地謡の歌う言葉がほとんど聞き取れないこともある。それでも囃子の掛け声が邪魔者扱いはされないのはなぜだろうか。そもそも掛け声は、動作を合わせるために発せられる合図である。

囃子の掛け声も例外ではない。能楽の音楽は八拍子の音楽で、その半分の四拍子が繰り返しの単位になる。「二、二、三、四」と繰り返される四拍子の開始地点（四拍目と二拍目の間）に「ヤ」という声が発せられる。皆に対し、さあ次が二拍目だということ伝えるのである。

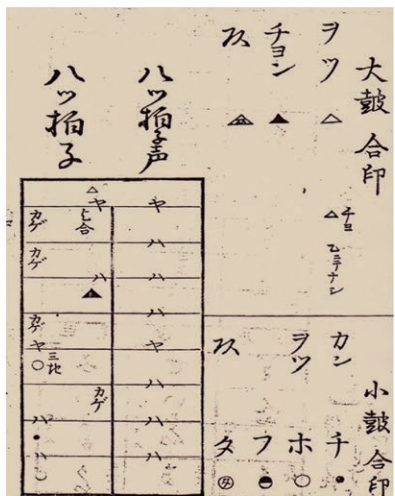
「ヤ」のほかに「ハ」という声がある。「ヤ」がはじまりの合図であれば、「ハ」はそれをしっかり受けとめていることを伝える声である。四拍子の単位でいえば、「ハ」は、「ヤ」につづく二拍目、三拍目の前などに発せられる。

ところで「ヤ」と「ハ」はしばしば、中国哲学における陰陽の二元論と結びつく。「ヤ」の声は陽にあたる。明るく、大きく掛けられる。「ハ」の声は陰にあたる。静かで控えめに発せられる。「ヤ」と「ハ」の対比は、能の囃子に限られるものではない。

狂言では、主人が「ヤ・イヤイ・太郎冠者、おるかや・い！」と呼び掛け、太郎冠者が、

姿勢を低くして「ハア」と答える。剣道の形の演技では、先に打ちかける役（打太刀）は「ヤ」と声を出して相手に切り掛かる。相手役（仕太刀）は、その一撃をかわした上で、「トオ」という声を出して相手を仕留める。また、現代の日常生活でも、知り合いに呼び掛けるときの声は「ヤ（ヨッ）」、答える声は「ハア（ハイ）」である。すべて能の囃子の掛け声と同じである。

話を戻そう。能の八拍子を図に書くと、八つの拍が縦に均等に並んでいる図になる。掛け声も、拍と拍の間に「ヤ」「ハ」などの文字で示すことができ、ごく簡単に示すことができる。



『八拍子』
(安永八年(1779)刊行、能の拍子の理論書)

しかしながら、「ヤ」と「ハ」の陰陽の性格のちがいが、また、拍と拍との間に掛け声があるか無いかのちがによっても、拍から拍への進み方は均等ではなくなる。陽から陽へ、陽から陰へという変化の波、あるいはうねりが生まれてくるのだ。

西洋音楽であれば、そうしたリズムの変化やうねりを伝えてくれるのは、指揮者の、あるいは演奏家自身の身振りであろう。その身振りが、音声のかたちに変換されたものが、鼓の掛け声である。

しかしなぜ、掛け声は、能の舞台の上を遠慮もなく大声で行き交うことになったのか。おそらく、舞台の上では余計な身振りが禁じられていたことも原因のひとつなのかもしれない。

藤田隆則（ふじた・たかのり）

一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究にも従事

◆真宗本尊のふるい

なら・東大寺二月堂はお水取りの行事で全国的に知られている。そのすぐ側に三月堂、正式には法華堂と呼ばれるお堂がある。東大寺に伝わる書物では、七三三年(天平5年)に立てられ、本尊が安置されたところ。堂内は天平仏の宝庫である。

特に本尊の不空羂索観音像(国宝)は四メートル近い乾漆像で、天平時代の代表的仏像である。空海が真言宗を伝える以前に、既にこのような密教系の仏像が伝えられていたのだった。

『不空羂索神変真言経』には、不空羂索観世音菩薩を图画す。大自在天の如し、首に宝冠を戴き、冠に化阿弥陀仏あり、鹿皮衣を被り、七宝の衣服、珠璣、環釧、種々莊嚴し、器械を執持す。と説かれている。「大自在天(シヴァ神)の如し」「鹿皮衣を被り」などといわれることで、インドのシヴァ神との関係が論じられる。なかでも持物の羂索(「けんじやく」とも読む)から「不空羂索観音」と呼ばれる。「不空」は「空しからずを」意味し、「羂索」は獵の投げ

縄である。巧みな獵師が仕損ずることなく、確実に獲物を捕らえるように、羂索をもつて逃げる者を絡め取って、巧みに仏道へ導く大悲をあらわしている。一面二目八臂の姿で、額に第三の目を持ち、第二の手は合掌、ほかには錫杖・蓮華・払子を持つ。

注目すべきは純銀製の宝冠で、多くの勾玉、管玉が用いられ、琥珀(ガラス)、ヒスイ、琥珀、真珠、水晶などの宝石で莊嚴されている。その中央に純銀の阿弥陀仏の立化仏が置かれ、串状の後光がつけられている。その豪華さから世界の三大宝冠の随一とされ、戦前には盗難被害まで起きた程である。

この立化仏こそ日本最古?の阿弥陀立像と思われる。後に鎌倉時代に快慶が製作した「安阿弥様式」の阿弥陀仏像のモデルとなられたと考えられる。現代に至るまで真宗寺院のご本尊はこの「安阿弥様」を元として像造されている。

法華堂には、梵天・帝釈天像をはじめ、秘仏の執金剛神像などが安置されている。以前は日光・月光の両菩薩がおられたが、現在は東大寺ミュージアムに移られている。

編集後記

「ころにじごくがあるよひにちまいにちほのおがもゑる」法語カレンダー3月の言葉は「妙好人」と呼ばれる浅原才市だった。この度、鈴木大拙の『妙好人』を改めて読んでみた。気になることが書かれてあった。発刊は昭和23年、戦後まもなくである。

一本当の意味での世界戦争が今にも始まるかのように見える。もともと戦争なるものは丁度酒飲みのようについには酒が酒を飲むことになる。その結果はわれら人間の滅亡だ。理性の上では何もかも善くわかっている、それで止められないとするとそれには人間以上のもの、神だというわけに行かぬなら悪魔に支配されていくということになる。技術の発展はいつもその悪魔の指導下にあるかに思われる。一外来の刺激に興ずること、自然の「征服」に没頭すること、理性以外に天下なしときめてかかること、このような性格の持ち主の欧米人に参考の資料を提供したい。と『妙好人』執筆の動機を明かされていた。さて戦争、気候変動等それはまさに今、的確な予言、現実となつている。大拙氏が着目された『日本の霊性』その意義や価値、改めて我々に問いかけられている。

合掌

表紙の絵

成道聖地拝陽

(東本願寺襷絵七面の内)

塔が見えると吸い寄せられる、と和辻哲郎が書いていたが、最初の渡印ではガヤからリキシヤで10km余りの尼蓮禪河沿いの道を走った。仏陀伽耶の大塔が南側に見えてくると早くお参りしたいと心がときめいた。あれから半世紀が過ぎた。何回巡礼したかわからないが、行く度に村が町となり、飛行場ができ、道ができて、各国の寺院が増え、国際仏教都市のようになりつつある。昔を知っている者にとっては落ち着かなくなつてしまった。誰でも泊めてくれたビルマ寺院の小屋屋が懐かしい。昔は大塔の内外に、奉獻仏塔の基壇に彫られた千体仏の出土した断片が、ゴロゴロと無造作に落ちていた。村から東に出ると尼蓮禪河がある。乾季は水が無いが、雨季は胸まで浸かつてスジャータ村まで歩いたことがある。今は橋が出来ているが、尼蓮禪河を歩いている人は村の人しかなく静かである。河の中州を移動しながら写生をしていた。大塔に陽が沈んで行く様は西方極楽浄土を観想させる風景である。

畠中光享(はたなか こうきょう)

日本画家/インド美術研究家
/真宗大谷派僧侶

2023年7月1日発行 発行所/浄土真宗を弘める会 萬福寺内 大阪市西區南堀江1-14-23 tel:06-6531-1328 fax:06-6531-1327 e-mail: ktda8.10@gmail.com

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/ (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区建阪2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)